

円高のニュースが毎日のようにラジオやTVで報道され、日本経済に対する影響についての論議もにぎやかである。

この円高によって日本人の1人当りの所得はアメリカ、カナダ、西ドイツと並んで53年度は6000ドルを超えるだろうといわれている。われわれの給料も世界の一流国並みになったことになる。しかし、どうも実感が湧いてこない。経済の先生にうかがってみた。先生の説明によれば、たとえば住宅事情についてみるならば、世帯数に対する住宅の率は一流国の水準であり、日本人の1人当りの貯蓄高も1976年には西ドイツを追い越し一流国並みである云々。どうやら実質的にも日本人の生活レベルは一流国の仲間入りをしたらしい。しかし、これは平均値で比較しているのであって、欧米諸国は上・下の差が大きい日本は平均化された社会であり平均値の近辺に大部分の人が集中している。ピンとこないのはそのせいである。われわれが接する欧米人はその国では中の上クラス以上のエリートであって、その人たちの生活ぶりとを比較しているからピンとこないであろう。

ところで円高によってわれわれ庶民の生活はどう変わっているのだろうか。確かに輸入洋酒は安くなった。かつては貴重品扱いにしていたジョニ(赤)が2500円位になっている。先日、ジョニ(赤)とサントリー・オールドを並べて飲み比べてみたのであるが、どうもサントリー・オールドのほうがうまいのである。そこで洋酒にくわしい人に質問してみた。ジョニ(赤)はサントリーの角ビンより下だろうといっていた。してみるとわれわれは長い間だまされていたことになるが、これは如何に。

また、円高が話題になりはじめた頃「この調子が年末まで続く」と電気料金の値下げがくるかも知れない」など同僚と話し合ったものである。ところが間もなく新聞やTVは電気・ガスの円高差益還元をとりあげ毎日のようにニュースに折込み、とうとう政治問題に発展し、還元をすることになってしまった。引続いてプロパン、石油製品などにも及ぶのであろう。

ところが一方では私鉄運賃は7月の国鉄運賃値上げにならって値上げするし、その値上げのリーダーである国鉄は54年4月から8%の運賃値上げを計画しているそうだ。参考までに総理府統計局の調べによれば、42年度の平均価格と52年度の平均価格を比較すると、水道は2.17

倍、ガスは2.08倍、灯油は2.21倍、国鉄は2.47倍、私鉄は2.42倍、郵便は3.45倍、電話は1.87倍となっているのに対して、電力は1.42倍であるという。どうなっているのだろうか。

不況とはいうものの電力需要は順調に伸びて、7月は昨年同月に比べ電灯需要は16.1%、電力は7.5%の増加率であり不況を脱した感がある。今年の夏はとくに暑くクーラーは飛ぶように売れ、ジーンズや水着は早くから岐阜の間屋街では見られなくなった。自動車もよく売れている。

日本人のこの活力はいったいどこから生まれるのだろうか。

今回の円高の原因を考えてみると、どうも先進国はイギリス病とかフランス病、北欧病といった×××病におかされているのに対して、日本にはそれが無いということのようだ。先日、長いことロンドンに住み最近帰国したという人から聞いた話であるが、「金曜日に組立てられた車は買わない。買ったなら一度修理工場で点検してもらってから乗れ、といわれている。それはネジが外れていたり、危険だからという意味である。レジャー資金を稼ぐために働くという世相はそこまできている」ということであった。

戦前は失業と飢えに対する恐怖感から彼らは真面目に働いた。戦後は完全雇庸制度、保険制度などが進展し、彼らはこの恐怖感から開放され、積極的にサボるようになった。ところが、日本ではそういう偉くない人がさらによく働き、商品の信頼性も高く、アフターケアもゆき届いているから輸出も増加の一途をたどってきた。日本人をエコノミック・アニマルというが、むしろ“君たちこそいったい何をやってるのか”とやってやりたい。

日本からアメリカ向けに輸出する車は左ハンドルにして部品類もアメリカ人に対して使いやすく考慮しているのに対して、アメリカからの輸入車は左ハンドルのままで、狭い路をガソリンを捨てるようにして走っている。乗っているのはヤーさんか芸能人くらいのもんだ。これでは買ってくれというほうが無理だ。日本の輸出は依然として強いと思う。

ORの手法という奴もアメリカから入ってきたものであるが、この現象をOR諸兄はどう解釈されるかうかがいたい。(M.M.)

円高に思う